

〈原著論文〉

## 状況概念としての化粧リスク懸念の検討

### The Examination of Perceived Makeup Risk as a Situational Concept

諸井 克英 宮武 梨奈\*  
(Katsuhide MOROI) (Rina MIYATAKE)

**Abstract**: The present study explored the influence of the partner who was anticipated to do an interaction on perceived makeup risk. Female undergraduates ( $N = 226$ ) were instructed to imagine one of four situations stories presented by a text. In the situations, the sex and the closeness of the partner were differentiated (the same or opposite sex; intimate or not intimate). The participants completed the Perceived Makeup Risk Scale, imagining one of the situations. The factor analysis (maximum likelihood estimation, promax rotations) for the scale indicated three factors. According to the results of the multivariate analysis of variance (perceived makeup risk as a factor within the subject; sex and intimacy as a factor between subjects), the perceived makeup was shown to be not-necessarily dispositional factor.

**Key words**: apprehension about makeup risk, sex of partner, closeness of partner, multivariate analysis of variance.

## I. 問題

「顔という特殊な部位を装う行為」である化粧行動は、一義的な仕方ではなく、例えば、1990年代に限っても a) 「ハリウッド女優メイク模倣時代」(1940-50年代)、b) 「装飾的・技巧的メイクアップ全盛時代」(1960-70年代)、c) 「ナチュラルメイク時代」(1980-90年代)と変化する(余語, 1996)。さらに、近年、化粧行動を営む者が、SNSの日常生活への浸透と連動して若年化している。

例えば、女性の化粧行動・意識に関する大規模なインターネット調査(首都圏に住む15~74歳の女性1800人; ポーラ文化研究所, 2018)によれば、「10代後半」の化粧行動は例えば次のような点で活性化している。a) 毎日あるいはほぼ毎日メイクを行っている者(2015年

30.7%→2018年46.0%)、b) 毎日あるいはほぼ毎日スキンケアを行っている者(59.3%→73.3%)、c) 使用メイク・アイテム・カテゴリー数(7.94→9.44)、d) 使用スキン・アイテムカテゴリー数(5.36→6.45)。さらに、「10代後半」は、メイクやスキンケアのアイテム購入時の情報源として「SNS」に依存している(それぞれ、53.5%、48.3%)。つまり、若年女性にとっても、化粧行動はますます日常化しており、化粧行動を支える心理学的メカニズムの解明は重要となっている。わが国でも、化粧行動を支える心理学的メカニズムに関する様々な研究が行われている(高木(監修)・大坊(編), 2001など)。本稿では、化粧リスク懸念(板垣・諸井, 2011など)に焦点をあて、その概念の吟味を試みる。

消費行動の研究文脈で、Robertson(1970)は購買状況における知覚されたリスクに注目した。このリスクは、a) 製品の性能に関係した機能的リスクと、b) 製品が幸福感や自己概念を高めるかに関係した心理社会的リスクに大別される。このようなリスクの抱き方には個人

同志社女子大学生生活科学部人間生活学科特任教授  
\*人間生活学科2020年度卒業生

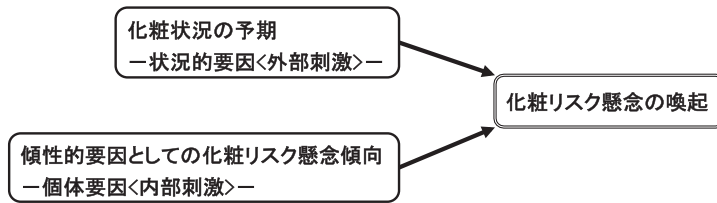


図1 化粧リスク概念の2面性

差が存在し、それが様々な仕方で消費行動上の差異をもたらすことになる。板垣・諸井（2011）は、このようなRobertsonの考えを化粧に関する意識や行動に適用し、化粧に伴うリスクの知覚が存在すると考えた。この知覚を「化粧行動を思い浮かべた時に予想される化粧効果性に伴う懸念」と定義し、化粧リスク懸念と呼んだ。

その上で、この懸念を測定する尺度を作成し、様々な心理学的概念との関連を一連の研究で検討した。a) 化粧意識、女性ファッション誌接触傾向や、自尊心（板垣・諸井，2011）、b) 独自性欲求、セルフ・モニタリング傾向や、対異性不安（板垣・諸井，2012）、c) 日常的劣等感や、化粧後の感情（諸井・安見，2020）。

ところで、心理学研究では、当該事象の原因として個体要因と状況要因との区別が一般的である。元々Robertson（1970）が提起した消費行動におけるリスク知覚は、個体要因として設定されている。しかしながら、購買対象の性質や置かれている状況によって喚起されるリスクである可能性も存在する。このように考えると、筆者らが取り組んできた研究で設定された化粧リスク懸念の扱いは曖昧であるといえる。例えば、諸井・安見（2020）では、化粧リスク懸念は、日常的劣等感という個体要因による影響を受けるが、化粧後の感情に影響をもたらす個体要因として設定された。つまり、化粧リスク概念が性格と同様に傾性的概念として仮定されているのか、他の傾性的特徴や置かれている状況により左右される概念なのか曖昧なまま取り扱われているのである。

そこで、本研究では、心理学の一般的図式（例えば、Lewin（1951）は人の行動が人と環境の関数と定式化した： $Behavior = F(Person, Environment)$ ）に沿って化粧リスク懸念が状況的要因と内的要因の影響をとともに被ると仮定した上で（図1）、状況的要因の影響が存在することを明らかにする。この目的のために、女子大学生を対象として、化粧を予期する状況（相互作用することが予期される相手の性別と親密さ）を操作し、化粧リスク懸念の喚起を検討する実験を試みた。

## II. 方法

### 1. 調査対象および調査の実施

京都府内に位置する女子大学における社会心理学関係講義の受講生を対象にした。応答システム「マナビー」を利用して調査を実施した。（2020年6月4日～11日／6月15日～22日）。システムの性質上匿名性には欠けるが、a) 実施にあたって結果を全体として処理し個人ごとに回答を問題にしないことやb) 成績と無関連であることを強調した。

質問紙に対する回答を事前チェックし、以下に該当する者を除いた。a) 青年期の範囲を逸脱している者（25歳以上）、b) 「大学に行くとき」や「休みの日に遊びに行くとき」に「ほとんど化粧しない」と答えた者、c) 同性あるいは異性の「最も親しい友だち」を挙げなかった者、およびd) 化粧リスク懸念尺度に完全回答しなかった者。その結果、残りの132名を分析対象とした（2年生59名、3年生61名、4年生12名）。回答者の平均年齢は19.90歳（ $SD = .79$ , 19～22歳）であった。

### 2. 質問紙の構成

質問紙では、回答者の基本属性や日常の化粧の有無に関する設問に加え、想像場面を操作した教示文を呈示した。その上で、想像した場面での化粧リスク懸念尺度への評定を求めた。

#### (1) 想像場面の操作

本研究では、日常生活で抱いている化粧リスク懸念の程度を尋ねるのではなく、化粧をする場面によって懸念が異なるかを検討した。そのために、次のようにして想像場面を操作した。本研究では、想像場面で交わる相手の性別（同性、異性）と相手との親密さ（親密、非親密）を組み合わせ、 $2 \times 2$ の実験デザインを用いた。なお、親密条件の場合には、場面を想像しやすくするために、回答者の最も親しい同性あるいは異性を1人同定させた（実際に用いた教示文を付表1に示した）。

## (2) 想像場面での化粧リスク懸念の測定

板垣・諸井 (2011) は、化粧リスク懸念を「化粧行動を思い浮かべた時に予想される化粧効果性に伴う懸念」と定義し、38 項目から成る化粧リスク懸念尺度を作成した。諸井・安見 (2020) は、板垣・諸井 (2011) や後続研究である板垣・諸井 (2012) の分析で明確な傾向がなかった 6 項目を除く 32 項目尺度を利用した。なお、これらの尺度では、回答者に過去 6 ヶ月の生活を振り返らせ、化粧をしたときの様子にあてはまる程度を回答させている。

本研究では、この尺度を利用し、呈示された場面に回答者がおかれたときに、化粧に関して抱くかもしれない気持ちを尋ねた。32 項目それぞれについて 4 点尺度で回答させた (「4. かなり心配になる」, 「3. どちらかといえば心配になる」, 「2. どちらかといえば心配にならない」, 「1. ほとんど心配にならない」)。

なお、先述の日常の化粧に関する質問で、「大学に行くとき」や「休日に遊びに行くとき」に「化粧をしない」と回答した者、および b) 「6 ヶ月以上親しくしている同性あるいは異性」を挙げなかった者には、この尺度への回答を求めなかった。

## (3) 対象とした条件別回答者

最終的に化粧懸念リスク尺度に完全回答した者の条件別人数は以下の通りであった。a) 同性-親密条件 41 名、b) 同性-非親密条件 30 名、c) 異性-親密条件 22 名、d)

異性-非親密条件 39 名。

## III. 結果

## 1. 化粧リスク懸念尺度の検討

## (1) 項目水準での検討

尺度項目について、項目平均値の偏り ( $1.5 < m < 3.5$ ) と標準偏差値 ( $SD > .60$ ) のチェックをした。その結果、5 項目が不適切であった ( $m \approx 1.5$ : 「risk\_15 化粧した後で後悔するのではないか」, 「risk\_16 化粧をしていく場所にふさわしくないのではないか」, 「risk\_19 実用性に欠けるのではないか」, 「risk\_26 それだけのお金をかける値打ちがないのではないか」, 「risk\_27 自分の年齢には合わないのではないか」)。

## (2) 因子分析の実施

次に、残りの 27 項目を対象に因子分析 (最尤法、プロマックス回転  $k=3$ ) を行い、初期解での初期共通性も適切であった ( $> .52$ )。初期因子固有値  $\geq 1.00$  を基準に 2~4 因子解が算出可能であった。a) 特定因子への負荷量が十分に大きく (絶対値  $\geq .40$ )、b) 他因子への負荷が小さい (絶対値  $< .40$ ) という基準を設け、各項目が単一の因子にのみ .40 以上の負荷量を示すように項目を削除しながら a) と b) の基準を充たすまで分析を反復した。最終的に 3 因子解で解釈可能な因子パターンが得られた (表 1)。

表 1 化粧リスク懸念尺度に関する因子分析 (最尤法, プロマックス回転 ( $k=3$ )) の結果一回転後の因子負荷量

	(a)	(b)		(a)	(b)
【I. 自己顕示懸念】 ( $r = .62 \sim .77, \alpha = .92$ )			【II. 効果持続性懸念】 ( $r = .62 \sim .70, \alpha = .88$ )		
risk_2 自分を引き立てることができないのではないか。	顕	.86	risk_22 派手すぎるのではないか。		.70
risk_1 愚かに思われるのではないか。	顕	.81	risk_29 すぐ、あきがるのではないか。	効	.68
risk_3 流行に鈍感だと思われるのではないか。	顕	.78	risk_31 顔つきに、合わなくなるのではないか。	効	.67
risk_9 懐みがないと思われるのではないか。		.73	risk_28 化粧品の質が、悪いのではないか。		.58
risk_4 人から変な目でみられるのではないか。	顕	.70	risk_23 肌触りが悪くなるのではないか。	効	.55
risk_7 個性を発揮することができないのではないか。	逸	.67	risk_25 分不相応なのではないか。	逸	.55
risk_8 趣味やセンスが悪いと思われるのではないか。	顕	.53	risk_18 自分の地位や立場にふさわしくないのではないか。	釣	.54
risk_12 すぐ流行遅れになってしまうのではないか。	逸	.53	risk_11 手持ちの服と組み合わせにくいのではないか。	逸	.41
risk_13 大胆すぎるのではないか。	逸	.50			
-----			-----		
【III. 化粧くずれ懸念】 ( $r = .58 \sim .83, \alpha = .88$ )					
risk_14 化粧くずれが、目立ちやすいのではないか。	<	.90			
risk_10 汗で化粧くずれしやすいのではないか。	<	.87			
risk_5 化粧くずれが、しやすいのではないか。	<	.78			
risk_30 化粧のノリが、悪いのではないか。		.64			
risk_24 すぐに化粧直しをしないとイケないのではないか。	<	.42			
				I	II
			[因子相関]	I ***	.62 .35
				II ***	.46

$N = 132$

初期因子固有値  $> 1.38$ : 初期説明率 62.89%

適合度検定:  $\chi^2_{(168)} = 278.97, p = .001$

(a) 先行研究 (諸井・安見, 2020) で抽出された因子との対応: 化粧規範からの逸脱懸念, 釣り合い懸念, 化粧くずれ懸念, 自己顕示懸念, 効果持続性懸念

(b) 当該因子における一回転後の因子負荷量

$r$ : 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値;  $\alpha$ : Cronbach の信頼性係数値

状況概念としての化粧リスク懸念の検討

同じ 32 項目を使用した諸井・安見 (2020) で抽出された因子と対応させながら、3 因子を解釈した。第 I 因子に高い負荷を示した項目の大半は、自分自身を顕示することを目的とした化粧がうまくいかない怖れを表しており、「I. 自己顕示懸念」と命名した。第 II 因子は、負荷の高い項目が持続的な化粧効果に関する不安を示しており、「II. 効果持続性懸念」と名づけた。第 III 因子では、化粧のりが悪くなることを表す項目の負荷が高いので、「III. 化粧くずれ懸念」因子とした。

以上の結果に基づいて、各因子への負荷量を基準 (絶対値  $\geq .40$ ) に項目を選別し、これらの下位尺度項目を構成した。下位尺度ごとに、1 次元性の確認を行い (項目-全体相関分析,  $\alpha$  係数: 表 1)、構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

2. 化粧リスク懸念に関する混合要因分散分析

化粧リスク懸念下位尺度 3 得点を被験者内要因、相手の性別と相手との親しさを被験者間要因とする混合要因分散分析を行った (表 2-a, 2-b)。化粧リスク懸念の主効果、相手の性別の主効果、および相手との親しさの主効果がそれぞれ有意であった。何の有意な交互作用効果も見られなかった。

化粧リスク懸念の有意な主効果は懸念の側面によって高低があることを示しており、多重比較を行うと (「II. 効果持続性懸念」  $\approx$  「I. 自己顕示懸念」 < 「III. 化粧く

ずれ懸念」) の傾向が認められた。化粧リスク懸念の 3 側面間の差異が一般的であるかどうかは曖昧である。なぜならば、後述するように本研究では、異なる想像条件を提示された回答者の反応をまとめて因子分析を行ったからである。

相手の性別および相手との親しさに関する 2 つの有意な主効果は、相手が異性のほうで、相手と親密でないほうでそれぞれ懸念が高まることを表している。この 2 つの有意な主効果は、本研究の予想と一致する。つまり、相互作用する相手によって化粧リスク懸念の高低が見られることは、回答者が抱く日頃の懸念が相互作用に単純に持ち込まれるのではなく、相互作用する相手の性質 (ここでは同性か異性か、親しいかそうでないか) によって懸念が喚起されるからである。

IV. 考察

本研究は、化粧リスク懸念に対する状況的要因による影響を検討した (図 1)。そのために、予期される相互作用相手の性別 (同性、異性) と相手との親密さ (親密、非親密) の 2 要因を操作した。まず化粧リスク懸念に関する因子分析を行い、抽出された 3 因子に基づき下位尺度を構成した。化粧リスク懸念 3 下位尺度得点を被験者内変数として含めた混合要因分散分析の結果、化粧

表 2-a 化粧リスク懸念下位尺度得点に関する条件別平均値 (化粧リスク懸念  $\times$  相手の性別  $\times$  相手との親密さ)

[相手の性別]	[相手との親密さ]	N	I. 自己顕示懸念		II. 効果持続性懸念		III. 化粧くずれ懸念	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
同性	親密	41	1.56	0.70	1.61	0.62	2.29	0.84
	非親密	30	2.00	0.64	1.91	0.62	2.49	0.84
異性	親密	22	1.82	0.86	1.87	0.84	2.73	0.75
	非親密	39	2.22	0.64	1.94	0.63	2.73	0.80

表 2-b 化粧リスク懸念下位尺度得点に関する混合要因分散分析 (化粧リスク懸念  $\times$  相手の性別  $\times$  相手との親密さ) \* の結果

化粧リスク懸念の主効果**	$F = 82.86, df = 1.60, 204.57, p = .001$
化粧リスク懸念 $\times$ 相手の性別の交互作用効果**	$F = 1.20, df = 1.60, 204.57, ns.$
化粧リスク懸念 $\times$ 相手との親しさの交互作用効果**	$F = 3.26, df = 1.60, 204.57, ns.$
化粧リスク懸念 $\times$ 相手の性別 $\times$ 相手との親しさの交互作用効果**	$F = 0.33, df = 1.60, 204.57, ns.$
相手の性別の主効果	$F = 4.94, df = 1, 128, p = .028$
相手との親しさの主効果	$F = 4.70, df = 1, 128, p = .032$
相手の性別 $\times$ 相手との親密さの交互作用効果	$F = 0.53, df = 1, 128, ns.$
化粧リスク懸念の主効果に関する多重比較 (Bonferroni の検定: $p < .05$ )	効果持続性懸念 $\approx$ 自己顕示懸念 < 化粧くずれ懸念

\*化粧リスク懸念: 被験者内要因; 相手の性別, 相手との親密さ: 被験者間要因

\*\*Greenhouse-Geisser による修正

リスク懸念の有意な主効果が得られた。また、相手の性別および相手との親しさの主効果がいずれも有意であった。これらは、相手が異性のほうで、相手と親密でないほうでそれぞれ懸念が高まることを表している。さらに、性別や親しさの要因と化粧リスク懸念との有意な交互作用効果は、まったく見られなかった。したがって、本研究の結果は、化粧リスク懸念が相互作用を予期した相手の属性によって明確に異なって喚起されることを示しており、本研究の目的を達成したといえる。

しかしながら、次の問題も残されている。本研究では、化粧リスク懸念の3側面が同定されたが、この3側面が設定状況の影響を被っていないかどうかは曖昧である。これを明らかにするには、まず4条件ごとに化粧リスク懸念に関する因子分析を行う必要があるが、本研究の1条件に含まれる人数を考慮すると、このような分析を行うには少なすぎる。つまり、条件あたりの観測数を増加させる必要がある。ところが、本研究では、相互作用が予期される相手の属性を被験者間要因として設定しているために、観測数を増加したとしても、もしも化粧リスク懸念が個体要因として存在するのであれば、元々の懸念の高さや懸念の構造が設定条件に持ち込まれる可能性もある。

したがって、設定条件ごとに因子分析を実施するための十分な観測数を確保した上で、条件を超えて化粧リスク懸念の基本的構造が同一であるか吟味することが重要である。さらに、今回は相手の性別や親しさを被験者間要因として操作したが、被験者内要因として設定条件を経験させ化粧リスク懸念を測定し、条件を超えて抽出される傾性的成分と条件によって異なる状況的成分を分離する試みが必要となるだろう。このような作業に引き続き取り組むことによって、先に呈示した図(図1)をさらに検討する必要がある。

#### 〈付記〉

(1) 本報告は、第2著者の宮武梨奈が第1著者の下で卒業研究(人間生活学科2020年度卒業論文)のために立案・実施した研究に基づいている。第1著者が再分析を行った。

(2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 27.0.0.1 for Windows を利用した。

## V. 引用文献

- 板垣美穂・諸井克英 2011 化粧リスク懸念尺度の作成と妥当性の検討 生活科学(同志社女子大学), 45, 12-19.
- 板垣美穂・諸井克英 2012 女子大学生における化粧リスク懸念と個人的傾性との関係-対異性不安, セルフ・モニタリング傾向, および独自性欲求との関連を中心として- 生活科学(同志社女子大学), 46, 11-20.
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science: Selected theoretical papers*. Harper & Brothers. 猪股佐登留(訳)『社会科学における場の理論』誠信書房
- 諸井克英・安見 萌 2020 女子大学生における化粧後の感情におよぼす劣等感および化粧リスク懸念の影響 総合文化研究所紀要(同志社女子大学), 37, 133-145.
- ポーラ文化研究所 2018 『女性の化粧行動・意識に関する実態調査 2015~2018-変化する10代後半の化粧行動-』[<https://www.cosmetic-culture.poholdings.co.jp/report/pdf/181214henka.pdf>]
- Robertson, T. S. 1970 *Consumer behavior*. Scott, Foresman and Company. 河村豊次(訳)『消費者行動の科学』1973 ミネルヴァ書房
- 高木 修(監修)・大坊郁夫(編) 2001 『化粧行動の社会心理学 -化粧する人間のこころと行動- 〈シリーズ21世紀の社会心理学9〉』北大路書房
- 余語真夫 1996 顔をつくる-化粧行動- 中島義明・神山 進(編)『まとう-被服行動の心理学-(人間行動学講座第1巻)』朝倉書店 119-138頁.

(2021年9月16日受理)  
(2021年10月28日採択)

付表 1 操作のために呈示した教示文

[同性－親密条件]

まず、あなたが6ヵ月以上親しくしている同性のうち、最も親しい同性の人物を1名思い浮かべてください。後の設問に答えやすくするために、この人物のイニシャルを記入してください。

( . )

イニシャルを記入してもらうのは、以下の場면을想像しやすくしてもらうためです。

今イニシャルを記入してもらった人物と大学が休みの日に繁華街にある人気カフェに行く約束をしたと想像して、次の場面を読んでください。

あなたにはすでに6ヵ月以上親しくしている同性のともだちがいます（イニシャルを記入してもらった人物です）。その人と大学が休みの日に2人で繁華街にある人気カフェに行く約束をしました。そのカフェは2人とも行ったことがないのですが、インターネットで人気のあるカフェだということが分かりました。さらに、そのカフェは2人のすまいからそれほど遠くないことが分かり、大学が休みの日に行く約束をしました。

その約束した休みの日に待ち合わせ時間の3時間前に目が覚めました。待ち合わせの時刻は午前11時半で、あなたのすまいから30分かかりません。

[同性－非親密条件]

まず、あなたが今通っている大学で授業を受けることを思い浮かべてください。あなたが通っている大学は女子大学なので、授業時の受講生は全員女性です。

ここでは、午前中の2講時と午後3講時を受講しており、学科に限定された授業ではないので、受講生の大半はほとんど知らない学生ばかりだと想像してください。また、あなたは、親元を離れ大学のすぐそばのマンションに住んでいるとします。このように想像して次の場面を読んでください。

あなたは今通っている大学の2限目と3限目の授業に出席します。通っているのは女子大学なので、授業時の受講生は全員女性です。2限目の授業も3限目の授業も学科に限定されていない授業なので、受講生の大半はほとんど知らない学生ばかりです。あなたは、大学のすぐそばに住んでおり、徒歩で大学まで通っています。この日の朝は授業開始時間の3時間前に目が覚めました。大学には、あなたのすまいから30分かかりません。

[異性－親密条件]

あなた自身が次の様な場面におかれたと、想像してください。

まず、あなたが6ヵ月以上親しくしている異性のうち、最も親しい異性の人物を1名思い浮かべてください。後の設問に答えやすくするために、この人物のイニシャルを記入してください。

( . )

イニシャルを記入してもらうのは、以下の場면을想像しやすくしてもらうためです。

今イニシャルを記入してもらった人物と大学が休みの日に繁華街にある人気カフェに行く約束をしたと想像して、次の場面を読んでください。

あなたにはすでに6ヵ月以上親しくしている異性のともだちがいます（イニシャルを記入してもらった人物です）。その人と大学が休みの日に2人で繁華街にある人気カフェに行く約束をしました。そのカフェは2人とも行ったことがないのですが、インターネットで人気のあるカフェだということが分かりました。さらに、そのカフェは2人のすまいからそれほど遠くないことが分かり、大学が休みの日に行く約束をしました。

その約束した休みの日に待ち合わせ時間の3時間前に目が覚めました。待ち合わせの時刻は午前11時半で、あなたのすまいから30分かかりません。

[異性－非親密条件]

あなたが通っている大学は女子大学ですが、あなたは、男女共学の大学にあるサークルに加入し活動しています。このサークルの活動は、週2回程度、夕方に行われます。このサークルでの活動に6ヵ月間従事しています。

ここでは、あなたの大学での授業は午前中だけで、夕方からこのサークルの活動に参加すると想像してください。

あなたが通っている大学は女子大学ですが、あなたは、男女共学の大学にあるサークルに加入し活動しています。このサークルで取り組んでいる課題が地域づくりの研究ですが、サークルのメンバーはほとんどが男性です。自分は地域づくり研究に強い関心があり、対人関係をつくることにほとんど興味がありません。このサークルでの活動に6ヵ月間従事しています。

この日は、あなたの大学での授業は午前中だけだったので、いったん大学のすぐそばにある自分のすまいに戻り少し休みました。このサークルの活動開始時間の3時間前に目が覚めました。サークルの活動場所には、あなたのすまいから30分もかかりません。